



名大トピックス

No.141 平成17年2月28日発行 名古屋大学総務企画部総務広報課 編集 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 Tel (052)789-2016
http://www.nagoya-u.ac.jp

名古屋大学「東京フォーラム2005」が開催される



CONTENTS

・名古屋大学「東京フォーラム2005」が開催される.....	2	・地球水循環研究センターが公開講演会「雲をつかむ」を開催...	15
[全学ニュース]		・年代測定総合研究センターが体験学習を開催.....	16
・名古屋大学全学同窓会関東支部総会が開催される.....	3	・博物館がギャラリートークを開催.....	17
・有本文部科学省科学技術・学術政策局長を招き、「学術政策について」の意見交換会が開催される.....	4	[研究ナウ]	
・本学を当番校として国立七大学副学長懇談会を開催.....	5	・単子論(モノドロジー)という考え方の可能性	
・名古屋大学とイタリア国立核物理学研究所が学術交流協定を結ぶ.....	6	米山 優.....	18
・大学入試センター試験が実施される.....	6	・体の中でできる“さび”の科学 内田 浩二.....	20
[部局ニュース]		[キャンパスクローズアップ] 6 環境総合館.....	22
・医学部保健学科が外部評価報告書を刊行.....	8	[レポート]	
・大学院工学研究科が「赤崎 勇先生文化功労者顕彰祝賀会」を開催.....	9	・スマトラ沖津波災害の調査に出かけて.....	24
・今年度の農業教育公園・講演会が終了.....	10	[名大生のスポーツ&イベント]	
・農学国際教育協力研究センターが2004年度第8回オープンセミナーを開催.....	10	・大学院国際開発研究科津波支援院生有志の会が「スマトラ沖地震の被災者支援を考える会」を開催.....	25
・大学院国際言語文化研究科が中沢新一氏による講演会を開催.....	11	[INFORMATION]	
・大学院環境学研究科がUFJ環境財団寄附講義公開シンポジウムを開催.....	12	・授業料の額の改定について.....	26
・講演会「三河地震から60年を迎えて」が開催される.....	13	[イベントカレンダー]	27
・平成16年度先端技術共同研究センター高度技術研修が開講される.....	14	[本学関係の新聞記事掲載一覧] 平成17年1月分.....	29



名古屋大学「東京フォーラム2005」が開催される



講演する平野総長

名古屋大学東京フォーラム2005が、1月27日(木) 学士会館(東京都千代田区)において、名古屋大学全学同窓会の共催を得て開催されました。

このフォーラムは、国立大学が法人化のなかでどのような展開をめざしつつあるのか、本学の現状を踏まえながら考察するとともに、「ユビキタスとナノテクデバイス」をテーマに、本学の最先端の技術シーズ等を紹介・展示することによって、これからの大学と産学連携のあり方を探ることを目的に開催されたもので、関東地方を中心に約250名の参加がありました。

講演会では、平野総長が「名古屋大学の法人化と展開」と題して講演を行い、これまでの本学の基盤整備の実績を踏まえ、今後の大学運営についての基本的な考え方をわかりやすく紹介しました。

続いて行われた産学連携交流会では、平野総長、丹羽宇一郎全学同窓会関東支部長(伊藤忠商事株式会社取締役会長)のあいさつの後、林義郎(ボーダフォン株式会社最高顧問)の発声で乾杯し、参加者はなごやかな雰囲気の中で、情報交換等を行いました。また、

昨年11月に設立された全学同窓会関西支部を代表して、筧哲男支部長(三洋化成株式会社代表取締役会長)からあいさつがありました。

技術シーズ展示会では、豊田合成株式会社の協力により、赤崎勇特別教授の研究成果を紹介する特別展示「青色発光デバイはいかに創られたか」をはじめ、「ナノテク プラキエーション型移動ロボット」(福田敏男工学研究科教授)「バイオ医療のための新原理マイクロナノメカトロニクス」(生田幸士工学研究科教授)「ユビキタス社会を実現する基盤ソフトウェア」(河口信夫情報連携基盤センター助教授)「豊かで美しい持続可能な社会(エコトピア)の実現をめざして」(エコトピア科学研究機構) 中部 TLO、名古屋大学協力会、名古屋大学全学同窓会及び産学官連携推進本部の展示ブースが設けられ、各ブースの担当者から来場者に説明がありました。



(左) あいさつする筧全学同窓会関西支部長
(右) 乾杯の発声をする林ボーダフォン株式会社最高顧問



名古屋大学全学同窓会関東支部総会が開催される



あいさつする丹羽全学同窓会関東支部長

全学同窓会関東支部総会が、1月27日(木)、学士会館(東京都千代田区)において、会員約200名の参加を得て開催されました。

全学同窓会関東支部は、平成15年3月に丹羽宇一郎全学同窓会副会長(伊藤忠商事株式会社取締役会長)を支部長として設立され、本学と連携した産学連携拠点作りを中心に活発に活動してきました。また、学士会館内にある名古屋大学東京連絡所において、毎月1回、本学の産学連携関係者や全学同窓会役員を交えて、

関東支部幹事会が開催され、「東京フォーラム2005」の準備にも熱心に取り組んできました。

総会では、丹羽関東支部長のあいさつ、大学役員と全学同窓会役員の紹介が行われた後、片岡大造関東支部事務局長(名古屋大学産学連携コーディネータ)から、これまでの活動と今後の活動計画が説明されました。続いて、丹羽関東支部長をはじめとする関東支部役員の紹介があり、総会は無事終了しました。

総会終了後は、東京フォーラムと合同の懇親会が行われ、産学連携交流会参加者も交えて、歓談が行われました。



説明する片岡全学同窓会関東支部事務局長



産学連携交流会の様子



関東支部役員の紹介の様子



有本文部科学省科学技術・学術政策局長を招き、「学術政策について」の意見交換会が開催される

「学術政策について」の意見交換会が、1月18日(火) シンポジオンホールにおいて、有本建男文部科学省科学技術・学術政策局長を話題提供者に招き、教育研究評議会構成員、事務企画連絡協議会構成員等幹部職員約180名出席のもと開催されました。

意見交換会では、平野総長のあいさつ、有本局長の紹介が行われた後、有本局長が「これからの科学・技術政策について」と題し、科学・技術体制の変遷、21

世紀の世界と日本の政策課題、科学技術基本計画の第2期と第3期の違い、21世紀の大学と社会と科学・技術、科学技術と安全補償、産学官連携の10年と次への飛躍等について、約40分にわたって講演を行いました。

続いて、「知」の活用や社会還元、多様な人材の育成確保等について、活発な意見交換が行われ、予定の1時間を超え、盛況のうちに終了しました。



講演する有本文部科学省科学技術・学術政策局長



会場の様子



本学を当番校として 国立七大学副学長懇談会を開催

本学を当番校として、国立七大学副学長懇談会が、1月21日(火)、本部第2会議室において開催されました。

会議では、七大学の副学長・理事18名の出席のもと、懇談事項「大学の教員組織の在り方について」では、あるべき教員組織構成の考え方とは何か、大学の職員組織(教員、事務職員、技術職員)の在り方をどのように考えるか等について、「21世紀COEプログラムの今後(平成19年度以降)の在り方について(研究体制支援等についての考え方等)」では、平成19年度以降、各大学がどのように「ポスト21世紀COEプログラム」を展開していこうと考えているのかについて、「大学運営の問題点と今後の在り方について」では、危機管理方策、広報戦略等について、それぞれ活発な意見交換を行いました。

また、「今後の本会議の在り方」について協議を行い、現在、七大学で実施している「研究体制協議会」、「施設担当理事連絡会」及び「学生関係協議会」との関係



開催のあいさつをする山下理事

も考慮し、今後この会議を「管理運営を中心に議論していく場」と位置付け運営していくこととして、会議を終了しました。



懇談会の様子



名古屋大学とイタリア国立核物理学研究所が 学術交流協定を結ぶ



フィルムの前で握手する山下理事(中央)とユージェニオ・コッチャ所長(左) 右は丹羽理学研究科教授

本学は、1月25日(火)、イタリア国立核物理学研究所(INFN)と素粒子物理学及び関連分野の研究を促進するため、INFN 本部にて、山下理事と R. Petronzio 所長の出席のもと学術交流協定書に署名しました。

INFN は、素粒子、原子核、宇宙物理分野に関する研究機構で、Frascati 加速器研究所、Gransasso 研究所、Legnaro National Laboratories、Southern National Laboratories の直轄研究所には合計2,000名と19の拠点大学に研究員を含む3,300名を派遣しています。

本学では、大学院理学研究科の丹羽研究室、理工総研の堀川研究室が1980年代からスイス CERN 研究所と素粒子物理学に関する共同研究を推進してきており、2000年から CERN、INFN 及び本学がリーダーシップを持って国際共同で推進するニュートリノ振動研究 OPERA を開始しました。OPERA 計画は、CERN の大型加速器から飛ばしたニュートリノを、約730キロ離れたローマ郊外の Gransasso 研究所に設置した検出器でニュートリノを捉え、質量の存在の検証を行うこととしています。この実験には丹羽研究室が富士写真フィルム社と共同開発した特殊な写真フィルムを使います。このフィルムは土岐市の東濃鉦山でリフレッシュ処理を行い、去る12月7日、イタリアに向けて150万枚が出荷され、1月20日に Gransasso 研究所に着きました。協定書の署名に先立ち、1月24日(月)、Gransasso 研究所において、本学関係者、研究所スタッフ及びフランス、ドイツ、スイスなどの OPERA の共同研究者ら約100名が見守る中で、フィルムの搬入式が盛大に行われました。



Gransasso 研究所を視察する山下理事(左)と丹羽理学研究科教授(右)



学術交流協定を締結する山下理事(右)とロベルト・ペテロジオ INFN 所長(左)



大学入試センター試験が実施される

- 本学関係会場で6,320名が受験 -



試験に臨む受験生

平成17年度大学入学者選抜大学入試センター試験が、1月15日(土)、16日(日)の二日間、全国712会場で実施され、本学関係では、東山キャンパスや学外の高校など8会場で約6,320人が受験し、全国で約52万4千人が受験しました。

試験当日は、朝早くからコートやマフラーで寒さ対策をした受験生が、試験直前まで、参考書やノートを広げ、最終チェックをしたり、友人との会話でリラッ

クスしたりするなどして、それぞれの方法で試験に備えていました。また、豊田講堂やグリーンベルトでは、各高校がのぼりや横断幕を掲げて、引率教師等が受験生を激励していました。試験後には、ほっとした表情を浮かべながら、友人同士で問題の答え合わせをする受験生の姿が見られました。

本学関係の試験場では、初日に雨が降ったものの、順調に行われ、初日の外国語から、2日目の最終科目の公民まで予定どおり行われました。

また、平野総長と渡橋事務局長・理事が、本学関係の各試験場を訪れ、試験場主任、本学教職員にねぎらいのことばをかけました。

なお、本学の個別学力検査は、分離・分割方式により、前期日程が2月25日(金)、後期日程が3月12日(土)に実施されます。



学外の試験場を訪れ、職員にねぎらいのことばをかける平野総長と渡橋事務局長・理事



家路に向かう受験生



医学部保健学科が外部評価報告書を刊行

医学部保健学科は、昨年8月に実施した外部評価の結果をとりまとめ、昨年10月に外部評価報告書（名古屋大学医学部保健学科の現状と課題）を刊行しました。

同学科は、高度な医学的専門知識・技術とともに、豊かな人間性や的確な判断力を有する多様な医療技術者を育成することを目的として、平成10年に医療技術短期大学部を改組し、4年制大学としました。その後、平成14年に修士課程を、また、平成16年には博士課程を設置し、教育・研究の枠組みを完成させました。

こうした機会に、下記の学外有識者による外部評価委員会を開催し、平成10年4月から平成15年3月までの5年間の教育理念・目標、教育体制、教育内容・方法、大学院教育、国際交流・協力等の自己点検、評価報告書（平成16年3月）を中心に、学科全体及び5つの専攻ごとの外部評価を実施しました。

同学科では、外部評価委員会が出された指摘事項や助言を基に、国民のニーズに応え得るコ・メディカルスタッフの養成や学問的發展に努めていくことにしています。

外部評価委員会（平成16年8月17日(火)開催）
看護学専攻

高橋 照子（愛知医科大学看護部長）

放射線技術科学専攻

石口 恒男（愛知医科大学放射線科教授）

検査技術科学専攻

倉茂 達徳（東京福祉大学副学長）

理学療法学専攻

三木 明德（神戸大学医学部保健学科長）

作業療法学専攻

矢谷 令子（新潟医療福祉大学教授）



外部評価委員会の様子



自己点検報告書と外部評価報告書



大学院工学研究科

「赤崎 勇先生文化功労者顕彰祝賀会」を開催

- 赤崎名誉教授に特別教授の称号を付与 -

大学院工学研究科は、1月9日(日) 名古屋市内のホテルにおいて、赤崎 勇名誉教授が昨年11月に文化功労者として顕彰されたことを記念して、「赤崎 勇先生文化功労者顕彰祝賀会」を開催しました。

この祝賀会では、赤崎名誉教授の文化功労者顕彰を祝うとともに、研究成果の展示及び青色発光ダイオードの開発にいたる学術成果を記念して建設される「赤崎記念研究館」の模型展示を行い、企業・大学を問わず、先生と研究等で交流のある180名余りの参加者とともに、先生の業績を称えました。

祝賀会は、高木工学研究科事務部長の開会の辞で始まり、祝賀会を主催した実行委員会を代表して、澤木工学研究科長からあいさつがあった後、来賓の平野総長、堀籠登喜雄豊田合成株式会社取締役会長及び松尾稔前名古屋大学総長から祝辞が述べられました。

併せて、赤崎名誉教授の文化功労者顕彰に敬意を表し、名古屋大学特別教授の称号が平野総長より授与されました。これは、本学の大学教員または本学の大学教員であった者のうち、ノーベル賞、フィールズ賞、文化勲章、文化功労者又はそれらと同等の研究教育活動の功績をたたえる賞若しくは顕彰を受けた者に対し付与されるもので、野依良治特別教授（理化学研究所



謝辞を述べる赤崎特別教授

理事長)につづき、2人目の授与となります。

次に、電気系 OB で元工学部長の榊 米一郎名誉教授の発声により乾杯が行われ、参加者全員で赤崎特別教授の文化功労者顕彰を祝いました。続いて、赤崎特別教授の教えを受けられた西永 頌豊橋技術科学大学長及び天野 浩名城大学教授から記念品及び花束が贈呈された後、赤崎特別教授から謝辞が述べられ、宮田工学副研究科長の閉会のあいさつをもって、会は盛会のうちに終了しました。



記念撮影：特別教授称号記を掲げて



参加者と談笑する赤崎特別教授



今年度の農業教育公園・講演会が終了

大学院生命農学研究科附属農場は、平成16年度農業教育公園・講演会の第4回として、12月11日(土) 山内章生命農学研究科教授による「私たちの暮らしや食べ物と海外の農業」と題する講演会を開催しました。

この講演会は、地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」で建設された農業館を利用して開催されているもので、最終回となった今回の講演会には、40名ほどが参加し、熱心に聴講しました。

講演で、山内教授は、初めに、食料に関する「安心・安全」は、食べる人だけに限らず、加工する人、生産する人、すべての人に関わっているとの認識について話し、具体的な例として、マレーシア、インドネシアから輸入されているヤシを挙げました。ヤシは、食用、油脂及び非食用として多方面に利用され、日本人はヤシの恩恵を十分に享受して生活していますが、日本人のほとんどが、ヤシがどこで、どのように生産され、どのような製品に使用されているかを知らないまま利用しているのは不自然であると述べました。また、現地では、ヤシを栽培するため、耕作しやすい畑は全てプランテーションに利用され、農民はやせた耕地へと移動せざるを得ない実情についても話しました。最後に、山内教授は、どこで誰が何をどのように生産しているのか、それを誰がどのように加工しているかを手掛かりに、私たちとその人たちや、地球や環境との関わりを理解し、これを踏まえ、私たちの暮らしのありようを考えることが重要であると締め括りました。

附属農場では、来年度以降も、農業教育公園・講演会を開催する予定です。



講演会の様子



農学国際教育協力研究センター

2004年度第8回オープンセミナーを開催

農学国際教育協力研究センターは、1月19日(水)「ナミビア大学農学部への研究協力 - 血液型を介しての遺伝学 -」をテーマに、2004年度第8回オープンセミナーを開催しました。

講師は、2002年度と2003年度の2回にわたり、国際協力機構(JICA)の短期派遣専門家としてナミビア大学農学部を訪問し、動物科学(養鶏学)分野の研究者の指導をしてきた水谷 誠氏(財団法人日本生物科学研究所付属実験動物研究所主任研究員)で、同大学での研究支援活動の具体的な内容と、実験指導を通じての感想などについて講演しました。

セミナーで、水谷氏は、ナミビア共和国が1990年に南アフリカから独立後、国民の大半が住む北部地域の小農の食糧事情を改善するために、ナミビア大学に農学部を設立したものの、ナミビア人による教授陣を早急に育成する必要があったことから、ナミビア人教員に博士学位を取得する力量をつけるための“人づくり協力”を日本政府に要請してきた事情や、水谷氏の専門分野(養鶏学)のカウンターパート(相手方)研究者に対する具体的な実験指導方針とその実践状況などについて説明しました。また、土着鶏の血液型や外観形質に関する収集データの確認方法、博士論文の書き方に関する準備などの説明に、同分野を専門とする参加者から多くの質問が出され、熱心な質疑が行なわれました。



オープンセミナーの様子



大学院国際言語文化研究科が 中沢新一氏による講演会を開催

「多元文化と未来社会」研究会（大学院国際言語文化研究科）は、2月8日（火）文系総合館カンファレンスホールにおいて、中沢新一中央大学総合政策学部・総合政策研究科教授を講師として、第2回講演会「宗教の未来」を開催しました。

この研究会は、平成16年度名古屋大学教育研究改革・改善プロジェクト（総長裁量経費）に採択された研究プロジェクトとして、1980年以降における「メディア」、「ジェンダー」、「トランスレーション」などの分野を含む多元文化のグローバルな規模での展開を考察し、未来社会の建設に寄与できる研究拠点を形成することを試みるものです。

講演会で、中沢教授は、「資本主義社会は宗教と無縁なものではないどころか、宗教、とりわけキリスト教における三位一体論をそれ自身の規定的な論理として抱え持っています。『父、子、聖霊』の三位一体論を採用するキリスト教は、その複雑な論理をめぐる様々な論争（例えば、9世紀に端を発したフィリオクエ問題）を経験してきましたが、トマス・アキナスの

時代、13世紀にスコラ神学が盛期に入ると、『聖霊』が『父』と『子』との対称関係に不確定性を持ち込む要素として次第に理論化されるようになります。すなわち、可変的でうつろいがちな『愛』や『贈与』という要素が、『父』と『子』の安定的な同一関係、対称関係の間に介在するようになったわけです。」と述べました。中沢教授は、これは売り手（「父」）と買い手（「子」）との間に利子（「聖霊」）を発生させる余地を組み入れ、貨幣自身の自己増殖を可能にする資本主義空間の基底部で作用している論理と同位相にある（homologous）と主張しました。

講演により難解な論理が明快に解き明かされた後、中沢教授は、会場からの質問に一つ一つ丁寧に答え、延べ2時間30分にもわたる非常に中身の濃い勉強会となりました。

なお、「多元文化と未来社会」研究会では、今回の中沢教授の講演内容も含めた研究報告書を近日中に上梓する予定です。



講演会の様子



大学院環境学研究科

UFJ 環境財団寄附講義公開シンポジウムを開催

- 循環型社会作りへの挑戦 -

大学院環境学研究科は、1月22日(土)、シンポジオンホールにおいて、UFJ 環境財団寄附講義公開シンポジウム「循環型社会作りへの挑戦」を開催しました。

このシンポジウムは、同研究科で平成15年度から17年度にわたり開講されているUFJ 環境財団寄附講義の一環として、市民向けに開催されたもので、学生、一般市民など60名余りの参加がありました。また、このシンポジウムは、講演者等の話を一方的に聞くのではなく、参加した学生や市民と共に考えることを特徴としています。

シンポジウムでは、初めに、柳下正治環境学研究科教授及び石川雅紀神戸大学大学院経済学研究科教授が、1999年の「ごみ非常事態宣言」後の名古屋でのごみ減量化の取り組みを振り返るとともに、名古屋が目指すべき循環型社会とは何なのかについて問題提起を行いました。続いて、柳下教授を進行役に、石川教授、萩原喜之中部リサイクル市民の会代表理事及び名古屋市民代表3名の計5名のパネリストによって、名古屋が目指すべき循環型社会のあり方について討議した後、

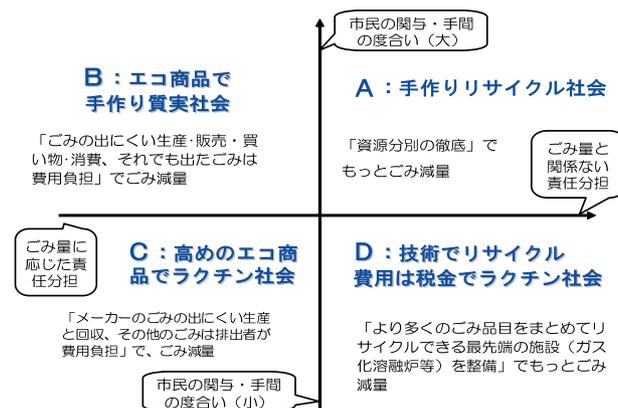


シナリオ選択の様子

参加した学生や市民の方々にも、名古屋が目指すべき「循環型社会」のシナリオを考えてもらい、予め専門家が用意した4つのシナリオの中から選択してもらいました。参加者の選択の結果、Bのシナリオが最も多く、次いで、Cのシナリオという結果になりました。



質問する参加者



シナリオ



講演会「三河地震から60年を迎えて」が 開催される

大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センターと災害対策室は、1月13日(木) 大学院環境学研究科レクチャーホールにおいて、講演会「三河地震から60年を迎えて」を開催しました。

1944年12月7日、M7.9の東南海道地震が発生(三重・愛知・静岡、死者1,223名)した45日後の1945年1月13日早朝、三河地域をM6.8の「三河地震」が襲い、死者2,306名を出しました。現在は、体験者も高齢となり、被災を伝える機会も少なくなっています。こうした背景から、体験者ととも、三河地震を考え、東南海地震や内陸地震に備えるために、この講演会は企画されました。また、この講演会は、地震の研究と被災体験、その発掘保存運動を内容としていること及び大学で市民が講演する点で、珍しいものといえます。

数日前から新聞やテレビで報道され、問い合わせが多数寄せられたため、当日の朝、急遽、第2会場を隣接のロビーに設けましたが、200名の参加があり、会場は超満員となりました。参加者のほとんどは、高齢

で、学童の時に被災された方も多く見受けられました。

講演会では、初めに、東京大学と気象庁の研究者による三河地震の地震活動に関する講演が行われ、三河地震は新潟県中越地震と同様に非常に余震活動が活発であったこと、2日前から前震が観測されていたことが報告されました。また、三河地震の発生があと半年遅ければ、戦争のために観測体制は完全に崩壊していたという指摘もありました。

続いて、災害対策室の2名の若手研究者、被災体験者の富田達躬さん(安城市)、被災体験を絵で伝えることに取り組んでいる画家の藤田哲也さんと阪野智啓さん(ともに愛知県立芸術大学)の対談が行われ、富田さんは70才を超えながらも当時の記憶を鮮明に述べ、また、2名の画家は被災を絵画に残す意気込みと苦労を語りました。

最後に、本学の研究者から、三河地震の断層運動について報告があり、講演会は盛況のうちに終了しました。



講演会の様子



平成16年度先端技術共同研究センター 高度技術研修が開講される

- 高齢社会における「ものづくり」のキーポイント -

エコトピア科学研究機構先端技術共同研究センターは、1月25日(火)先端技術共同研究センター研修室において、高度技術研修を27名の受講者の参加を得て開講しました。

この研修は、民間企業等から派遣される技術者又は研究者等の再教育を行い、併せて高度な専門的技術を習得させることで、創造性、先見性に富む人材育成に寄与することを目的として、毎年開講されているものです。

今回は、高齢社会に向けて、健常者と高齢者、障害者が共通に利用できる「ものづくり」が求められていることから、「高齢社会における『ものづくり』のキーポイント」をテーマに開講しました。また、高齢社会への対応には機械工学などの一つの分野だけからのアプローチでは不十分であるという認識に基づき、国際規格などの動き、機械・ロボット技術からのアプローチ、高齢者福祉施設の政策とその課題解決のための試み、リハビリテーション・エンジニアの現場経験に基づく設計のキーポイント、情報処理技術からのアプローチといった多様な視点から、次の5名の講師によ



畠山星城大学リハビリテーション学部教授の講義の様子

る講義が行われるというユニークなものでした。

- 1)「ユニバーサルデザインから人間中心設計まで
- 身体運動支援機器の設計開発を例として -」
大日方五郎(名古屋大学エコトピア科学研究機構
先端技術共同研究センター教授)
- 2)「デジタルヒューマン技術の実用性」
長谷 和徳(名古屋大学大学院工学研究科助教授)
- 3)「地域化・住居化する高齢者福祉施設の建築計画」
山下 哲郎(名古屋大学大学院工学研究科助教授)
- 4)「支援技術開発と利用者ニーズ」
畠山 卓朗(星城大学リハビリテーション学部教授)
- 5)「視聴覚処理技術と感覚代行支援」

大西 昇(名古屋大学大学院情報科学研究科教授)

受講者は、いずれの講義も熱心に聴講し、また、講義終了後には、受講者から休憩時間になっても質問が出されるなど、受講者にとって、今回のテーマが的を射た内容であったことを伺わせました。



長谷工学研究科助教授の講義の様子



地球水循環研究センター

公開講演会「雲をつかむ」を開催

地球水循環研究センターは、1月8日(土)、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて、一般市民向けの公開講演会「雲をつかむ」を開催しました。

この公開講演会は、同センター発足以来、毎年度1回開催されているもので、4回目となる今回は、愛知県内外の高校・大学・自治体・企業関係者や一般市民など105名の参加がありました。

近年、雲は降雨・豪雨等の水循環に加えて、気候変動・物質循環・人工降雪などの観点からも大変注目されるようになってきていることから、今回は「雲をつかむ」をテーマに、雲の形成と働きに関する最近の研究成果についての講演会を企画しました。

講演会では、初めに、中島映至東京大学気候システム研究センター教授が、「雲と気候変動」と題して、全球平均地表気温の上昇予測のばらつきを少なくするためには、雲を含む地球大気系の水循環プロセスとその人間活動に伴う変化の究明が必要不可欠であると力説しました。続いて、村上正隆国土交通省気象庁気象研

究所物理気象研究部第一研究室長が、「雲を人工的に変える」と題して、航空機から過冷却雲にドライアイス撒くことにより人工増雪が可能になったことを報告した後、坪木和久地球水循環研究センター助教授が、「計算機で雲・豪雨を作る」と題して、雲モデルCReSSの開発により、台風に伴う豪雨や梅雨前線に伴う集中豪雨などを高精度に再現できるようになったこと、また、近い将来、局地的な豪雨や積乱雲に伴う様々な危険な気象も予測できるであろうと発表しました。最後に、石坂 隆地球水循環研究センター助教授が、「大気汚染が雲を変える」と題して、大気汚染が東シナ海上で下層雲の微細構造を大きく変化させる事態になっていること、霧水・雲水の化学組成や降水の水質にも大きな影響を及ぼす可能性があることを解説しました。質問時間は限られていましたが、「日本への台風襲来頻度や豪雨は温暖化とどのような関係にあるのか？」などの質問が出されました。



質問する参加者



講演する中島東京大学気候システム研究センター教授



年代測定総合研究センターが体験学習を開催

- 古代人のテクノロジー体験活動2004 -

年代測定総合研究センターは、12月18日(土)、19日(日)の2日間、小中学生を対象とした体験学習「古代人のテクノロジー体験活動2004」を開催しました。

この体験学習は、同センターの研究成果を生かして、子供たちに古代人の叡知や技術を体験してもらい、次世代の自由な発想や想像力を養うことを目的として開催されているもので、今回で4回目となります。今回は、同センターのホームページや学校配布のポスター・新聞等を通じて募集した結果、小中学生49名と保護者2名が参加しました。

1日目の午前は、最初に、仲井 豊愛知教育大学名誉教授による「埴輪と製鉄の歴史」と題する講演を聞いた後、粘土で作った埴輪を焼くとどうして固くなるのか、鉄鉱石から純粋な鉄をどのようにして精製するのかという問題について講義を受け、これらの問題について考えました。午後からは、埴輪作りが行われ、

参加者は、細長く伸ばした粘土を積み上げて中空の埴輪を作るのに悪戦苦闘しながらも熱中し、思い思いの作品を時間いっぱいかけて作り上げました。

2日目は、埴輪をオープンで焼く実習、砂に混じっている磁鉄鉱を磁石で集める実習及び酸化鉄から純粋な鉄を取り出す製鉄実験(テルミット法)を行いました。製鉄実験では、参加者から、花火のように燃え上がって鉄が出来るたびに、大きな歓声があがりました。最後に、参加証が手渡され、焼き上がった埴輪とテルミット法で作った鉄の玉とともに、大切に持ち帰りました。

なお、埴輪作りの様子は、テレビや新聞で報道されました。



講義を聞く参加者



埴輪作りの様子



製鉄実験の様子



博物館がギャラリートークを開催



講演する岡田教育発達科学研究科助教授

第5回名古屋大学博物館企画展『家族の肖像 - 分岐する世界と統合する意識 - アーティスト小川信治と11人の名大生によるコラボレーション』（1月19日～2月18日）に関連する博物館特別講演会（通算37回目）として、岡田 猛教育発達科学研究科助教授と現代アーティストの小川信治氏によるギャラリートークが1月29日（土）開催されました。

初めに、博物館講義室で、岡田助教授が、50名の参加者に、「心理学基礎セミナー」の授業内容、特に、名大生とアーティストがどのようにコラボレーション（共同作業）したかについて、映像を使って説明しました。次いで、この授業結果がどのように今回の企画展に発展してきたかについて触れながら、（1）基礎セミナーという授業に新たな道を拓いたこと、（2）芸術家の創作心理に関する新しい研究成果が含まれること、（3）本物を重視する博物館で捏造という架空の物語の展示により、来館者に大きなインパクトを与えたこと等の点で非常にユニークな試みであることを分かりやすく解説しました。

続いて、展示会場に移動し、小川氏が架空の物語作成の基になった写真に関する説明、3グループの学生が創作した物語の特徴の解説、コラボレーションの結果描かれた絵の説明を詳しく行うとともに、写真や絵に隠された謎解きについても解説しました。また、岡田助教授から、認知心理学の研究コーナーの解説が行われました。

その後の質疑応答では、作品や解説文を前にして芸術論や現代アートに関する話に花が咲きました。参加者からは、「普通の博物館では味わえない展示を解説付きで見学することができてとてもよかった」、「自分の疑問を直接アーティストや先生にぶつけることができよかった」、「大学博物館ならではの実験的な展示を今後も続けてほしい」、「名古屋大学の基礎教育や研究の一端が少し分かったような気がする」などの意見が聞かれ、約1時間半のギャラリートークを堪能していました。



説明する小川氏



单子論(モナドロジー)という考え方の可能性

- 思考習慣の見直しのために -

米 山 優

近代科学が発展を始める時期に古代の原子論が再興され、多くの学者がそれを基礎にして、自然を説明しました。原子論は、空間の中を原子が飛び回り、その原子の離合集散で自然現象を説明するものです。デカルトも原子論を発展させた粒子論を採ります。それに対してライプニッツ(1646 - 1716)は单子論(モナドロジー)という考え方を立てるのです。原子論が唯物論的な方向に傾斜するのに対して、单子論は唯心論的です。言うならば世界の究極の単位は物質ではなく心だという考え方です。そう考えるとどんなことになるのかを、私は大学院のころからずっと研究してきました。

原子とは 分割することのできない物 の意です。それは完全に硬いので壊れない。つまり不生不滅な単位だというのが、あまりに素朴すぎるにせよ、とにかく古代の原子論の考え方です。そうした考え方の基本線はそのまま、原子の内部構造を含めて究極の粒子を探求してきたのが現代の素粒子論であり、そこで見

えてきたのが、寿命のある(それも短い)素粒子と場の理論でした。

ライプニッツは究極の単位を物質の方向に求めることをやめ、三次元的な拡がりを持たないものに求めます。单子(モナド)です。それは拡がりを持たないのだから壊れようがない。モデルは、心です。原子との違いはどのようなものでしょう? 原子はその離合集散で全てを説明するための作業仮説でした。つまりどんな風に、どれほど集まるか というのが関心の的です。量的な扱いが、当然、予想されます。それに対して、単子は、どれほど多くのものを、みずからに、映しだしているか とでもいうことを考えさせます。質の話なのです。

ものごとを扱うには、それを物として扱うのか、心として扱うのかが問題になるとことがあります。人間が相手の場合が良い例ですし、社会についてもそれが問題になるはずで。しかし、すべてを物として扱うと



モナドロジーの美学
(名古屋大学出版会、1999)



情報学の基礎
(大村書店、2002)

いう思考習慣が私たちにはついてしまっていないでしょうか？ 文化について語るときにさえ、私たちはそういう習慣に囚われています。実際、個々の文化を島や圏域のように考えることは原子論的です。Multiculturality とか Interculturality とか言ったところで、個々の culture を孤立させた上で、それらを数えたり、手をつながせようとしているだけのことです。(学問で言えば、学際的な [interdisciplinary] 営みもまだそのレベルに留まっています。)そうした考え方を批判しつつ成立する Transculturality という概念を巡る議論が、今までボローニャやシドニーでの私も参加した国際会議でなされています。

もちろん、心の方に向かって、それは不生不滅なのだと言って平然としていれば、物の方向に向かうのと大差はありません。単子論も原子論と同じように、そのままでは、それに寄りかかって安心できるような何かを求める習慣に囚われているとも言えます。こうした不動な単位を破碎した上で思想を創ることが現代思想の課題の一つです。西田幾多郎は仏教的な「空」を基礎にそれに取り組み、A. N. ホワイトヘッド、M. セール、G. ドゥルーズそして P. レヴィといった人々は「実体」に代えて「出来事」という概念を用いてそれを遂行します。単子論的な考え方を基礎にしなが、それを批判的に発展させることによってです。特に最

後の P. レヴィはこうした現代思想の可能性を、「集合的知性」という考え方を基に 情報の哲学 へと展開しつつあります。

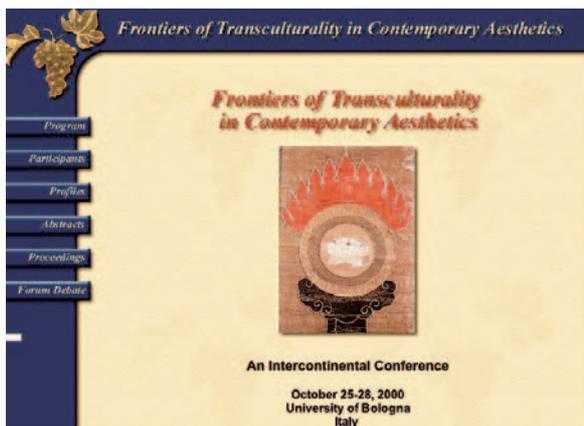
私自身は、最初の著書で、単子論的に考えるとはどういうことかを明らかにし、さらに情報工学や情報科学とは区別される 情報学 という学問の出発点を二番目の書物で創りました。現在、発展させつつあるその新たな学問は、以上述べたような議論を含み込んだ新たな単子論の姿なのです。

プロフィール

よねやま まさる

名古屋大学大学院情報科学研究科教授(情報創造論講座)
昭和27年東京都生まれ。東京大学大学院人文科学研究科で哲学を専攻。博士(学術)。ライプニッツの研究や翻訳を中心とした活動を続けてきました。現在は、美学的な分野に研究の重点を移しつつあります。

著書:『モナドロジーの美学』(名古屋大学出版会、1999)、『情報学の基礎』(大村書店、2002)、Internet e le Muse (共著、Milano、1997)、Frontiers of Transculturality in Contemporary Aesthetics (共著、Torino、2001)、Aesthetics & Chaos (共著、Torino、2002)など。訳書:ライプニッツ『人間知性新論』(みすず書房、1987)、ライプニッツ著作集、(共訳、工作舎、1989、1990)など。



<http://www.unibo.it/transculturality/>



体の中でできる“さび”の科学

内 田 浩 二

健康と長寿。年齢を重ねるに連れて高まる私たちの最大の関心事の一つといえるでしょう。緑茶を飲むように心掛け、また日々スポーツジムに通うのも何とか健康でいたいと願うからこそ。私たちの研究グループでは、こうした人類が避けては通ることのできない生命現象である「からだの衰え」のプロセスにおいて、その因果関係が明らかにされつつある体の中の“さび”ともいえる過酸化脂質について、生命農学の特長を生かしたアプローチをしています。

“さび”の化学構造

生体膜などを構成している脂質は酸化されやすく、私たちの体の中ではこれを利用して様々な生理活性脂質が作られます。代表的なものにプロスタグランジンと呼ばれる酸化脂質があり、生体の恒常性維持に不可欠なものとして知られています。一方、脂質の酸化では、反応性に富んだ化合物（過酸化脂質）の生成も知られ、タンパク質や核酸などの生体成分を傷つけ、老化や疾病などの病態に関わることが示されてきていま

す。私たちは、傷つけられた生体成分の化学構造を詳細に解析し、“さび”ができる分子メカニズムを明らかにしてきました（図1に一例を示します）。そこで分かったことは、生体内で起きる“さび”の生成機構は、食品が劣化により着色したり、不快臭を放つ現象とそれほど変わらないということでした。

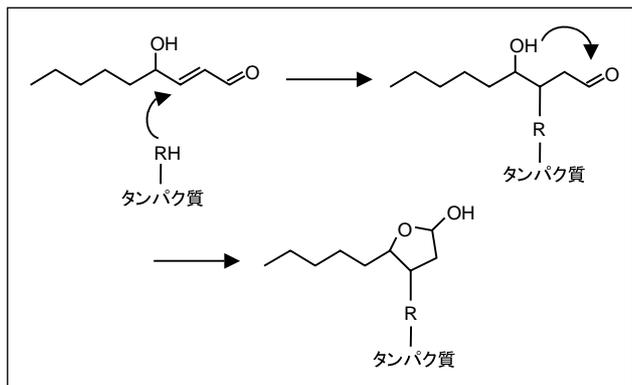


図1.“さび”の一種4-ヒドロキシ-2-ノネナルとタンパク質の結合。ヒドロキシル(OH)基のない12-ノネナルは加齢臭(別名“おやじ臭”)として有名になった。

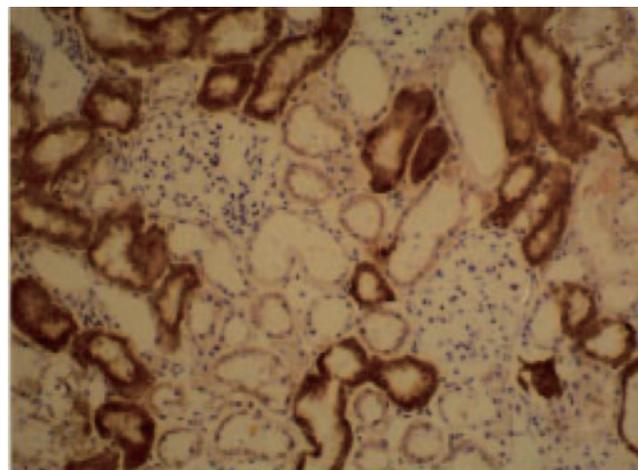
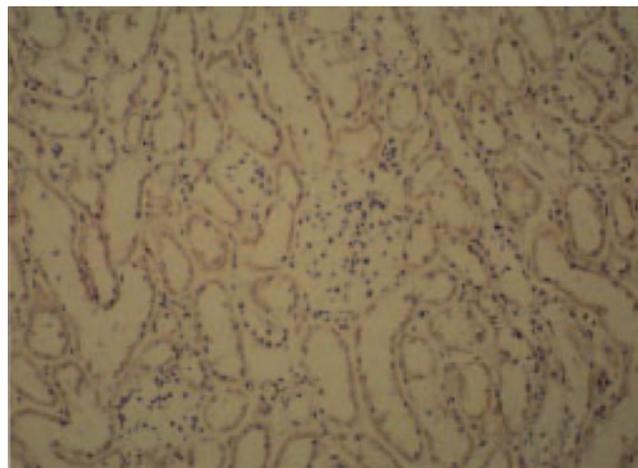


図2.体の中における“さび”の生成。(上)正常(下)酸化ストレス

バイオマーカーとしての“さび”

上述のように、過酸化脂質の多くはタンパク質などの生体成分と結合しやすい性質を持っています。体内で制御することが困難なこの化学的反応性こそ、病態における酸化脂質の意義を考える上で重要な点であろうと考えられます。私たちの研究グループでは、この性質を利用して、まずタンパク質に結合した過酸化脂質の免疫化学的検出法の開発を手掛けました。その結果、多岐に渡る過酸化脂質修飾タンパク質に対するモノクローナル抗体を世に出し、市販化を実現するとともに、世界中の研究者に無償配付することにより、我が国発のバイオマーカー研究の成果を配信し続けてきています。例えば、免疫組織染色法を使うことにより、図2のようにタンパク質に結合した“さび”を視覚的にとらえることが可能になります。

“さび”の標的

病態における過酸化脂質の生理的意義を解析する上で、ケミカルバイオロジー（化学生物学）は欠くことができません。特に、最近のマスマススペクトロメトリー技術の進展はこの分野の発展に大きく貢献しています。これにより、標的タンパク質の同定、及び分子構造解析が容易に行えることから、私たちのグループでも過酸化脂質が相互作用するタンパク質に関する知見を得たいと考えています。特異的に作用する分子（受容体、センサーなど）に関する知見は、今後この分野の方向性を占うものと予想されています。一方、こうしたタンパク質との反応性をもつ過酸化脂質に関しては、細胞毒性や遺伝子発現などに関する様々な生理作用が報告されており、それらの分子メカニズムの詳細もかなり明らかになってきました。特に、動脈硬化症や神経変性疾患などの慢性疾患においてみられる細胞変性への関与が示唆されています。また、細胞変性死では、多くの場合、変性タンパク質の生成蓄積を伴うことから、最近ではタンパク質分解系（プロテアソーム）との関係が推測されており、私たちもこうした点に関心を持っています。

将来への展望

サイエンスにすることがなかなか困難でありながら、社会的な関心が極めて高いこの分野。何とか基礎研究でも通用するようなレベルを維持しつつ、得られた知見を社会に還元できるような貢献を、と考えています。

プロフィール

うちだ こうじ

昭和58年 名古屋大学農学部
食品工業化学科
卒業

昭和63年 名古屋大学大学院
農学研究科博士課程
修了

昭和63年 名古屋大学農学部
助手

平成2年7月～平成4年8月

米国国立衛生研究所（NIH）博士研究員

平成8年 名古屋大学農学部 助教授

平成10年 名古屋大学大学院生命農学研究科 助教授

平成15年 名古屋大学高等研究院 流動教員

研究テーマ

内因性および外因性親電子活性種のケミカルバイオロジー

趣味

スポーツジム通い、秘湯めぐり、世界遺産めぐり、学生を鍛えること



環境総合館



環境総合館南側外観

環境総合館は、東山キャンパスの東側地区に建設された地上7階・地下1階建て、延べ面積5,960㎡の建物で、21世紀の人類の生存の鍵を握ると考えられている環境問題に、文理融合による広い視野から挑戦し、総合的な環境学の創成を目指すことを理念として、平成13年4月に創設された大学院環境学研究科を主体とする多様な横断型連携教育・研究活動を実施するための中核的な拠点として建設されたものです。

同館の概要については、昨年12月に開催された竣工記念式典、施設見学及び祝賀会の模様とともに、本誌 No.128で既に紹介されましたので、記憶に新しい方も多いでしょう。

この建物の構造面での大きな特徴として、地上部分にPCaPC構造（precast prestressed concrete structure = プレキャスト・プレストレストコンクリート構造）を採用したことが挙げられます。この工法の採用により、コンクリート部材の工場製作を主とした高い品質と耐久性の確保、大幅な工期の短縮と、南洋材を原料とする型枠用合板



躯体組み立て状況



PC 梁吊り上げ状況

の使用を抑制し、環境に配慮した建設廃材の低減に成功しました。また、現場での建設作業は、写真で見られるように整然とした中で進められました。この工法は、既に京都大学の桂キャンパスの整備や東京大学駒場 キャンパスの一部の建物に導入されているほか、各地の公共施設にも採用されるなど、近年脚光を浴びています。

また、環境学研究科の研究活動の一環である「地震動モニタリング」への対応として、建物基礎の杭内部に地震計を設置することを設計時より考慮し、大学としては画期的といえる試みを実現したことも大きな特徴の一つです。

この建物の完成とともに、キャンパスに分散していた環境学研究科の研究室の約20%が集中配置され、空間情報ラボラトリーや環境シミュレーションスタジオ、超微量環境物質解析ラボラトリーといった特殊な実験室が整備されたほか、レクチャーホール、講義室、セミナー室等の教育スペース及び事務関係諸室も集約されたことから、新たな研究成果の創出と教育研究機能の飛躍的な向上に結びついています。

(施設管理部)



建物紹介サイン



東山キャンパス

REPORT

スマトラ沖津波災害の調査に出かけて

2004年12月26日、世界を震撼させるニュースが飛び込んできました。スマトラ沖で発生したマグニチュード9の巨大地震と、それに伴う想像を絶するような津波災害のニュースです。過去に、アメリカ西海岸などで津波堆積物の調査を経験し、南タイの海岸地域における地形変化を現在の研究テーマの一つとしている私にとって、関係者の安否を心配するとともに、学問的な関心からも一刻も早く現地に出かけて被災地域の状況を把握したいという気持ちが高まりました。

ちょうど、授業の合間を縫って1月18日に日本を発することができ、南タイのプーケット島から、北方へ約100kmのタクアパ付近に至るアンダマン沿岸の海岸地域を踏査してきました。

現地の被害状況にはかなり地域差があり、著しい被害を受けた所とそれほどでもないところとの違いがかなりはっきりしています。マスコミを通じて数多く報道されたプーケット島にはいくつかのビーチがあるのですが、その多くはかなりの被害を受けており、とくに、最も賑やかだったパトンビーチでは海岸域のレストランや商店、ホテルなどが著しく破壊されていました。破壊されたホテルの多くはまだほとんど手のつかない状態のまま残されていたのですが、商店の中にはす



津波によって打ち上げられた漁船

でに営業を始めた所もあり、復興の早さを感じました。ただ、背後の津波を受けなかった地域では以前と変わらない感じで人々が活動しており、被災地と無傷の地域が隣接していることに妙な違和感を覚えました。

一方、北部のナムケムという漁村のように、海岸に面した地域がほとんど壊滅的であるという所もありました。ここでは、建物がほとんどすべて破壊され、残っている建物もまるで残骸のありさまでした。この付近だけで1000人以上の人たちが亡くなっていて、被害の実態や要因の解明が強く望まれています。

目下、科学技術振興調整費の援助によって、タイ政府の土地開発局や、南タイの拠点大学であるプリンスオブソンクラ大学との共同調査の準備を進めており、2月末には本調査のために現地を再び訪れることにしています。

なお、環境学研究科でも安藤雅孝教授、田中重好教授を中心とする調査団が生まれ、インドネシアのアチェを中心とする地域で調査を実施する予定となっていて、相互に情報交換を行ってよりよい成果を上げたいと考えています。

(この文章は、海津正倫環境学研究科教授に執筆いただいたものです。)



津波によって破壊されたナムケムの建物群



大学院国際開発研究科津波支援院生有志の会が 「スマトラ沖地震の被災者支援を考える会」を開催



あいさつする平野総長

大学院国際開発研究科津波支援院生有志の会は、1月28日(金)、同研究科プレゼンテーションルームにおいて、「スマトラ沖地震の被災者支援を考える会」を開催しました。

この有志の会は、昨年12月26日のスマトラ島沖における地震とそれに伴って発生した津波による被災地への中長期的な復興支援を目的として、1月12日に同研究科大学院生有志により設立されたものです。会では、募金活動、現地で活動する非政府組織(NGO)との連携及び関係者を招いての勉強会等の開催を予定しており、その第1回目の活動として、「スマトラ沖地震の被災者支援を考える会」を開催しました。

考える会には、留学生をはじめ学内外の関係者約120名の参加があり、平野総長及び中西研究科長から、この活動の取り組みに対して激励のあいさつがありました。特に、平野総長からは、「本学にも被災国からの留学生が多く学んでおり、無関心ではいけないところであり、院生有志の方々が支援の会を発足し、活動を展開していることは本学にとっても誇ることであり

ます。」とのエールが送られました。また、中西研究科長からは、「日本人の学生、被災国や被災国以外の学生、一般市民、NGOなどが連携することは、グローバル市民の視点からも重要です。」という主旨のメッセージが述べられました。続いて、インドネシアの留学生によるインドネシア・アチェ州の被災状況の報告及びスリランカ、タイの留学生、研究員による被害状況の報告があった後、参加者全員で「学生としてできる支援の方法」をテーマに、一般市民も交えて意見交換が行われ、支援活動に取り組むNGOとの連携や国際開発という研究科のテーマに沿う形で現地への実地研修をしてはどうか等の活発な意見が出されました。



スマトラ沖地震の被災者支援を考える会メンバー

INFORMATION

授業料の額の改定について

国立大学法人 名古屋大学

この度、文部科学省から、平成17年度以降の授業料標準額を改定する予定である旨の通知がありました。このことについて、役員会等において検討した結果、教育研究活動の財源を確保することによって、質の高い活動を行うことが重要であると判断し、平成17年度以降の授業料の額を下記のとおり改定することといたしましたので、予め御承知おきくださるようお願いいたします。

本学では今回の改定によることで、学生の皆さんの教育研究環境の充実等に、一層努めることとしましたので、御理解を賜りますようお願い申し上げます。

記

平成11年度以降に入学した学生に適用

区 分	改定後の額	現行の額	改定幅
学部学生・大学院生	年額 535,800 円	年額 520,800 円	年額 15,000 円
法科大学院生	年額 804,000 円	年額 804,000 円	(据 置)

聴講学生、特別聴講学生、研究生、科目等履修生に適用

区 分	改定後の額	現行の額	改定幅
聴 講 生	1単位 14,800 円	1単位 14,400 円	1単位 400 円
特 別 聴 講 学 生	1単位 14,800 円	1単位 14,400 円	1単位 400 円
研 究 生	月 額 29,700 円	月 額 28,900 円	月 額 800 円
大学院特別聴講学生	1単位 14,800 円	1単位 14,400 円	1単位 400 円
大 学 院 研 究 生	月 額 29,700 円	月 額 28,900 円	月 額 800 円
特 別 研 究 学 生	月 額 29,700 円	月 額 28,900 円	月 額 800 円
科 目 等 履 修 生	1単位 14,800 円	1単位 14,400 円	1単位 400 円

外国人留学生日本語・日本文化研修コース研修生に適用

区 分	改定後の額	現行の額	改定幅
外国人留学生 日本語・日本文化 研修コース研修生	月 額 29,700 円	月 額 28,900 円	月 額 800 円

外国人留学生日本語研修コース研修生に適用

区 分	改定後の額	現行の額	改定幅
外国人留学生 日本語研修コース 研修生	月 額 30,200 円	月 額 29,400 円	月 額 800 円

注：今回の料金改定は授業料の額のみとし、入学料及び検定料は現行の料金を据え置きます。



イベントカレンダー

開催月日

イベント・概要

9 .11 ~ 3 .5 オープンカレッジ「自由奔放！サイエンス」



目 的：高校生に、出来るだけわかりやすく、大学の研究室で行われている最新の研究やその熱意を伝えること

場 所：文系総合館カンファレンスホール

時 間：10時～12時

対 象：高校生、社会人

回 数：10回（いずれも土曜日）

<http://www-oc.soec.nagoya-u.ac.jp/>

連 絡 先：大学院経済学研究科エクステンション・サービス 052 - 788 - 6197

3 .3 高等教育研究センター第27回客員セミナー

場 所：文系総合館7階オープンホール

時 間：14時～

講 師：中津井泉リクルート(株)カレッジマネジメント編集長(高等教育研究センター客員教授)

演 題：名古屋大学のブランド力

連 絡 先：近田政博高等教育研究センター助教授 052 - 789 - 5692

3 .3 ~ 3 .4 大学院国際言語文化研究科・国際シンポジウム

テ ー マ：境界と文化創造 - 東アジアの中の古代、中世の日本(人、神、仏) -

場 所：文系総合館カンファレンスホール

連 絡 先：伊藤信博国際言語文化研究科助手 052 - 789 - 5282

3 .5 文学研究科公開シンポジウム



テ ー マ：公と私の日本近代

場 所：文学部237講義室

時 間：13時～16時30分

内 容：「公共性と言語の関係 - 公共圏はどのような言語によって支えられるのか」イ・ヨンスク(一橋大学大学院言語社会研究科教授)

「修正・増殖の戦記 - 戦記の作り出す公共性」成田龍一(日本女子大学人間社会学部教授)

「博覧会と歴史祭典 - 近代都市名古屋の「公共性」をめぐって」羽賀祥二(名古屋大学大学院文学研究科教授)

「イメージ消費をめぐる公私の変容 - 戦間期の映画スター形成」藤木秀朗(名古屋大学大学院文学研究科助教授)

連 絡 先：文学部・大学院文学研究科庶務掛 052 - 789 - 2202

開催月日

イ ベ ント ・ 概 要

3.8 名大機械・航空テクノフロンティア - 研究公開と産学連携 -



趣 旨：名大機械・航空系の研究成果を分かり易く紹介し、研究に対する理解を深めていただくとともに、最新の機械及び航空宇宙関連の技術シーズを提供して産学連携を積極的に推進することにより、社会貢献を図る。

場 所：名古屋市中小企業振興会館（吹上ホール）

時 間：10時～17時

プログラム

講演会（10時～14時10分）

- ・「情報社会を担うマイクロナノメカトロニクス」 三矢保永工学研究科教授
- ・「航空宇宙工学の散歩道、そこから生まれるもの」梅村 章工学研究科教授
- ・「からくり今昔」末松良一工学研究科教授
- ・「中部 TLO の事業紹介」徳永良邦名古屋産業科学研究所部長
- ・「トヨタの F 1 への挑戦」服部哲夫トヨタ自動車(株)専務取締役

研究成果展示（10時～17時）34ブース

入 場 料：無料

連 絡 先：名大機械・航空フロンティア実行委員会 052 - 789 - 5028

3.12 留学生センター地域貢献事業 「小中学校教員・日本語ボランティア現職者研修会」



場 所：あいち国際プラザ

時 間：13時20分～16時30分

講 演 者：田中 薫（大阪市立豊崎中学校教諭）

連 絡 先：浮葉正親留学生センター助教授 052 - 789 - 5771

3.23～7.31 第8回名古屋大学博物館特別展



テ ー マ：時を測る - 地球誕生から中世まで -

場 所：博物館

開館時間：10時～16時

休 館 日：月・火曜日 ただし祝休日は開館

入 場 料：無料

連 絡 先：博物館事務室 052 - 789 - 5767

本学関係の新聞記事掲載一覧（17年1月分）

	記 事	月 日	新聞等名
1	国家戦略を考える：理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授「知の世紀」生き抜く道を	1.1(土)	読売
2	板倉文忠・本学名誉教授 携帯電話の土台を築く	1.1(土)	朝日(朝刊)
3	住まいの地震対策：福和伸夫・環境学研究科教授に聞く 地盤を知り耐震性高めて“自分の身は自分で守る”	1.3(月)	中日(朝刊)
4	愛知万博特集：万博協会会長・豊田章一郎・全学同窓会会長「未来へビジョン示す」	1.4(火)	日経(朝刊)
5	上海に海外事務所開設予定 平野眞一総長は「本学の国際交流事業をさらに充実させたい」と話す	1.5(水)	中日(夕刊)
6	歯にまつわる最新の研究：上田実・医学系研究科教授ら 歯を丸ごと再生する研究	1.5(水)	日刊工業
7	今をつかんで：武岡洋治・本学名誉教授 苦しみ救済に使命感感じ牧師の道へ	1.5(水)	朝日(朝刊)
8	環境学研究科附属地震火山・防災研究センターと災害対策室企画講演会「三河地震から60年を迎えて」13日開催	1.6(木) 1.14(金) 1.19(水)	毎日(朝刊) 読売
9	「名古屋大学東京フォーラム2005」27日開催 「名古屋大学の法人化と展開」をテーマに平野眞一総長の講演、「名古屋大学協力会」の概要発表、技術シーズ展示会実施など	1.6(木) 1.25(火) 1.28(金)	日刊工業 中日(朝刊)
10	理工学振興会は2004年度の研究助成金交付先に川平友規・多元数理科学研究科助手、波多野学・工学研究科助手ら42人決定	1.6(木)	日刊工業
11	ペルーの電波望遠鏡支援の募金 福井康雄・理学研究科教授は「努力、応援したい」とコメント	1.6(木)	中日(夕刊)
12	年代測定総合研究センター C14を使用した年代測定法に成功 中村俊夫・年代測定総合研究センター教授は「犯罪捜査の決め手に」と話す	1.7(金)	中日(朝刊)
13	医学部附属病院で研修を受けていたイラク人医師、アサード・アミール・カラフさん帰国へ	1.7(金)	朝日(朝刊) 中日(朝刊) 読売
14	アップデート：茂登山清文・情報科学研究科助教授 病院に「やさしい美術」	1.7(金)	朝日(夕刊)

	記 事	月 日	新聞等名
15	医学部附属病院は1月中に「細胞培養センター」の整備に着手 担当の藤内祝・医学部教授は「再生医療で患者のQOL向上が図れる」と説明	1.8(土)	中日(夕刊)
16	スマトラ沖大地震による津波の被災国支援に留学生ら募金活動 「在日インドネシア学生協会・名古屋支部」代表・トミー・アプリアントノさん・本学大学院生は「日本と母国の橋渡しになりたい」と話す	1.8(土) 1.10(月)	日経(夕刊) 朝日(朝刊)
17	文化功労者顕彰祝賀会で赤崎勇氏に「特別教授」の称号授与	1.8(土) 1.10(月)	中日(朝刊) 日刊工業
18	名古屋市長選マニフェストの課題を小野耕二・法学研究科教授に聞く	1.10(月)	朝日(朝刊)
19	訃報：小川修三・本学名誉教授	1.10(月) 1.11(火)	朝日(朝刊) 他4社
20	名古屋市、中京大学とパソコンソフト「らくらくパソコンe-なもくん」を共同開発	1.11(火)	中日(朝刊)
21	中部空港着工4年常滑沖は：調査データを評価する検討委員会委員長・岩田好一郎・工学研究科教授は「長期的な視点で見えていかないと評価はできない」と指摘。独自にグループを作って調査してきた西條八束・本学名誉教授は「生物が住みにくい環境になっている」と警告	1.11(火)	中日(朝刊)
22	With：本学就活サポーター 就職の悩みアドバイス	1.11(火)	朝日(夕刊)
23	知的財産セミナー「中小企業の開発・知的財産戦略 知財を知り、己を知れば百戦危うからず」28日開催 山田基成・経済学研究科助教授ら講演	1.12(水)	毎日(朝刊)
24	「講書始の儀」理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授ら進講	1.12(水)	中日(夕刊) 朝日(夕刊) 日経(夕刊)
25	本学COE第20回オープンレクチャー 町田健・文学研究科教授が19日講演	1.12(水) 1.18(火)	朝日(夕刊) 中日(朝刊)
26	太陽地球環境研究所は12日、電離圏の様子を把握する「短波ドップラー・レーダー」を2005年度中に北海道陸別町に設置すると発表	1.13(木) 1.18(火)	毎日(朝刊) 中日(朝刊)
27	愛知県青少年保護育成条例の規制を強化する方針 愛敬浩二・法学研究科教授は「安易な法規制は解決を困難にする」とコメント	1.13(木)	朝日(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
28	老年学：井口昭久・医学系研究科教授 省カロリー 長寿への道	1.13(木)	朝日(朝刊)
29	自民党愛知県連は衆議院選小選挙区の候補者を決める選考委員会を開催 民間から堀内守・本学名誉教授ら出席	1.13(木)	朝日(朝刊)
30	神経が伸びるのを抑えている酵素の働きを貝淵弘三・医学系研究科教授ら説明	1.14(金)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)
31	ニッポン見聞録：コーチャル・リトゥさん・本学大学院生 日本のお正月に思う	1.14(金)	朝日(夕刊)
32	井口昭久・医学系研究科教授が初エッセー集「ちょっとしみじみ悩みつきない医者人生」を出版	1.14(金) 1.28(金)	読売 中日(朝刊)
33	わかる授業へ教師模索：東海市内の小、中学校教師と本学連携で授業改革取り組み紹介 的場正美・教育発達科学研究科教授は「大切なのは教師が、自らの授業を振り返ること」と語る	1.14(金)	朝日(朝刊)
34	東海地方12月の地震：林能成・災害対策室助手	1.14(金)	読売
35	教育学部で「中高年者のための人生・キャリア再設計セミナー」開催	1.14(金)	中日(夕刊)
36	JCBとUFJカードは医学部附属病院と医療費の支払いについてカード決済導入で合意	1.15(土)	中日(朝刊)
37	平和学を初めて学ぶ学生のためのテキスト「はじめて出会う平和学 未来はここからはじまる」発行 筆者は佐藤安信・国際開発研究科教授、中西久枝・同教授、三重大学教授の3人	1.16(日)	毎日(朝刊)
38	迫る巨大地震：活断層 鈴木康弘・環境学研究科教授「建設時に活断層の調査を義務化すべき」と話す	1.16(日)	朝日(朝刊)
39	学ぶ心：「高校生防災セミナー」修了式 セミナーの講師を務めた福和伸夫・環境学研究科教授は「防災リーダーとして最前線で動く力を身につけてほしい」と激励	1.17(月)	毎日(朝刊)
40	日本フードファクター学会(代表幹事・大澤俊彦・生命農学研究科教授)学術集会開催	1.18(火)	毎日(朝刊)
41	法学部公開講座 20日に佐分晴夫・法学研究科教授講演、28日に北住炯一・同教授講演	1.18(火)	中日(朝刊)
42	博物館企画展「家族の肖像 分岐する世界と統合する意識」 現代美術作家の小川信治さんと学生のワークショップの展示と岡田猛・教育発達科学研究科助教授のグループの研究記録など	1.18(火) 1.25(火) 1.29(土)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)

	記事	月日	新聞等名
43	叙位叙勲：従四位・奥田孝美・本学名誉教授	1.18(火)	読売
44	経済学研究科教授会は19日友杉芳正・経済学研究科長兼経済学部長の再任を決定	1.20(木)	中日(朝刊)
45	「1.17 KOBEあれから十年～地震なんかにはまけないぞう！なごや～」福和伸夫・環境学研究科教授の防災講演会など	1.21(金)	読売
46	「ローカル・マニフェスト推進ネットワーク東海」結成集会 後房雄・法学研究科教授の司会で首長らが体験談話す	1.22(土)	朝日(朝刊)
47	蘇るマンモス：小澤智生・環境学研究科教授らはマンモスのDNAの全塩基配列の解読を進めている	1.22(土)	読売
48	年代測定総合研究センター公開シンポジウム 宮治昭・文学研究科教授の特別講演「パーミヤン石窟画と年代について」24日、25日開催	1.22(土)	中日(朝刊)
49	水田洋・本学名誉教授らが呼びかけ、護憲派市民が「あいち九条の会」結成	1.23(日)	毎日(朝刊)
50	名古屋のごみ問題を考える公開シンポジウム「循環型社会作りへの挑戦」22日開催	1.23(日)	中日(朝刊)
51	名古屋に本社を置く民放ラジオ5局とNHK名古屋放送局が合同シンポジウム開催 福和伸夫・環境学研究科教授ら参加	1.24(月)	読売
52	岐阜県知事選、古田肇氏当選 後房雄・法学研究科教授「干渉されぬ自治体運営を」とコメント	1.24(月)	中日(朝刊)
53	時のおもり：池内了・理学研究科教授 防災のため意味知ろう	1.24(月)	中日(朝刊)
54	天動説は間違いだと言いつれまですか：浪川幸彦・多元数理科学研究科教授「嘆く大人の方が心配だ」	1.25(火)	日経(朝刊)
55	財団法人東海学術奨励会の平成16年度研究助成金交付対象者決定 選考は平野真一総長らが審査 助成が決定した研究者に上野宜久・理学研究科助手、林能成・災害対策室助手、梶村恒・生命農学研究科助手、村瀬聡美・発達心理精神科学教育研究センター助教授ら	1.26(水)	中日(朝刊)
56	新科論：幸運は準備にほほ笑む トップクオーク発見の第一報掲載の論文著者は阿部文雄・太陽地球環境研究所教授から始まり398人へのぼる	1.26(水)	朝日(朝刊)
57	文系コアカリキュラム・シンポジウム「教養教育の最前線 文系コアカリキュラムをつくる」28日開催	1.26(水)	毎日(朝刊)

	記 事	月 日	新聞等名
58	国際開発研究科の大学院生がスマトラ沖地震の復興支援に取り組もうと「津波支援院生有志の会」結成 28日に「スマトラ沖地震の被災者支援を考える会」を開く	1 27(木) 1 30(日)	中日(朝刊)
59	高等研究院会議は後藤俊夫院長の任期満了に伴い、後任に北住炯一教授を選出	1 27(木)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)
60	多元数理科学研究科教授会は浪川幸彦研究科長の再任を決定	1 27(木)	中日(朝刊)
61	国土交通省と給水資源開発公団がダム水源地環境整備センターと随意契約で約170億円を発注 紙野健二・法学研究科教授「調査公正性も疑問」とコメント	1 27(木)	中日(朝刊)
62	NTT 西日本名古屋支店「予想される東海地震に備え企業が取るべき対策とは」をテーマにトップセミナー開催 「過去の巨大地震から学ぶ地震対策」をテーマに安藤雅孝・環境学研究科教授講演	1 27(木)	読売
63	「都国籍条項控訴」最高裁が初の合憲判断 浦部法穂・法学研究科教授「管理職になれない理屈は出ないはず」とコメント	1 27(木)	中日(朝刊)
64	訃報：菊池洋一・本学名誉教授	1 28(金)	朝日(朝刊) 読売
65	ニッポン見聞録：韓秀蘭さん・本学大学院生 お菓子の受験応援団	1 28(金)	朝日(夕刊)

	記 事	月 日	新聞等名
66	愛知県の有識者会議(委員長・竹谷裕之・生命農学研究科教授)開催 「食と緑の基本計画」の最終案示す	1 29(土)	中日(朝刊)
67	丹羽公雄・理学研究科教授らグループ 日欧11ヶ国の共同実験「OPERA」の中核にあたる超高層乾板自動読み取り装置開発に成功	1 30(日)	中日(朝刊) 毎日(朝刊)
68	有識者による選考委員会(委員長・清水裕之・環境学研究科教授)で第12回愛知まちなみ建築賞に、IB電子情報館・地下鉄名古屋大学駅、野依記念物質科学研究館・学術交流館など7点決定	1 30(日)	中日(朝刊)
69	飛び入学：導入しても受験生集めに苦労「大学のランクへの意識が強い社会の見方が変わらないと難しい」と伊藤彰浩・教育発達科学研究科助教授話す	1 31(月)	中日(朝刊)
70	科学技術振興機構「研究成果活用プラザにおける事業化のための育成研究」課題に水谷宇一郎・工学研究科教授らのグループなど18件採択	1 31(月)	日刊工業
71	大学出版会：名古屋大学出版会 2004年はサントリー学芸賞を2作品が受賞するなど8賞受賞、2003年は同賞、大平正芳記念賞など5つの受賞と健闘	1 31(月)	読売

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>)でもご覧いただけます。



本誌に関するご意見・ご要望・記事の掲載などは総務広報課にお寄せください。

総務企画部総務広報課広報掛

電話：052(789)2016

FAX：052(789)2019

E-mail：kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

③4 須賀杯争奪駅伝競走大会

毎年10月から1月にかけてのロードレース・シーズンには、いわゆる「学生三大駅伝」 出雲全日本大学選抜駅伝(10月) 全日本大学駅伝(11月) 東京箱根間往復大学駅伝(1月)が開催されます。今回は、そのロードレース・シーズン中に豊田高専(豊田工業高等専門学校)と名古屋大学を舞台に開催される須賀杯争奪駅伝競走大会について紹介します。

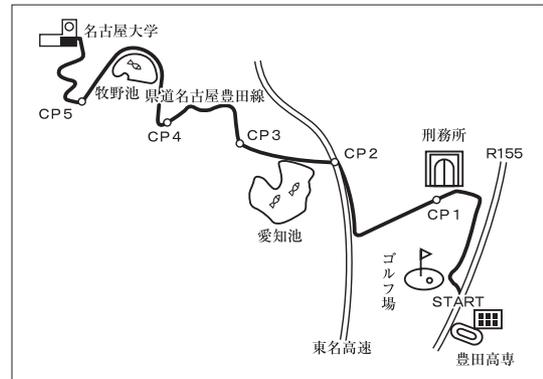
通称「須賀杯駅伝」は、毎年11月下旬頃に開催されます。コースは、下図のように、豊田高専から名古屋大学までの6区間約27kmとなっています。その名称は、創始者である須賀太郎(1903~1986)本学名誉教授にちなんでいます。須賀は、名古屋大学教授時代の1956(昭和31)年から約3年間、学生部長を務めるとともにスポーツを通じての教員学生間の交流を図り、本学体育会の発展にも尽力しました。

当時、名古屋大学工学部教授で陸上競技部顧問をしていた須賀は、1963年4月に豊田高専が設置された際に同校の初代校長に就任し、10年間校長を務めたのち1974年3月に同校を退官しました。その間、豊田高専においてもスポーツ振興にも力を注ぎました。

須賀杯駅伝のように、大学と高専との共同開催で一般道を利用する駅伝は全国的にも数少ないとのことですが、本学と豊田高専の双方でスポーツ振興を図った須賀であったから実現することができた駅伝であるといえます。1964年に第1回大会が開催された須賀杯駅伝は、2004年11月28日秋晴れのもと第41回大会が開催されました。この大会の参加チーム数は本学33チーム・豊田高専26チームの計59チームで、競技の結果、本学のチームが須賀杯を手中に収めました。



須賀太郎 豊田高専初代校長



須賀杯駅伝ルート図(名大トピックスNo.139より)



須賀杯



駅伝競争大会の様子(名大トピックスNo.139より)

本連載で紹介できる名古屋大学の歴史に関する情報をお持ちでしたら、
大学文書資料室(052-789-2046、nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)へご連絡下さい。